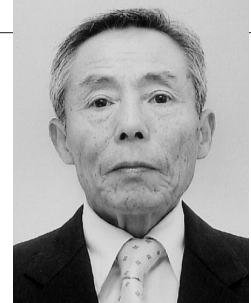


職業能力開発総合大学校 名誉教授  
吉松 孝夫



## 熟練技能の継承

今更という気もするが、「団塊の世代・2007年問題・技能の継承」なる用語が、メディアで盛んに取り上げられている。団塊の世代と2007年問題は近年耳にするようになった言葉であるが、『技能の継承』はその背景こそ異なれ「ものづくり」の分野では昔から実行されてきた。

徒弟制度の時代は、親方と弟子の関係で寝食を共にしながら、長い年月をかけて匠の業を継承していた。現代は公的機関や職場で基礎的な技術と技能を修得後、OJT方式で職務に必要なノウハウを伝授する企業が多い。ものづくりの現場にメカトロ機器が導入されるようになった1980年代以後は、大企業を中心に最適な条件で機器を制御するための情報収集、すなわち「技能の数値化」が指向されるようになった。これは、熟練技能者が保有するものづくりのノウハウを科学的に解明し、数値情報に置き換えようとするものである。

徒弟制度やOJT方式が「人から人への継承」であるのに対し、メカトロニクスは「人から機器への伝達」である。前者は受け継いだ技能者がさらに発展させて後輩に伝承できるが、後者の機器は指令どおりに駆動するも自己学習の機能がない。メカトロニクス機械に新たな情報を伝達するのは「人」で、コンピュータが発達した今日でも『技能継承』の重要性が叫ばれるゆえんでもある。

技能の中には、文書化やマニュアル化が可能な要素もあるが、単一工程でも要素が複雑に絡み合い、不具合要因の解明が困難な作業も多い。若年者の技能離れや団塊世代の大量退職に伴う技能者不足の問題が背景として存在するも、それ以上に危惧されているのは、熟練技能者が保有する高度な技能（文書化やマニュアル化が困難で『勘やコツ』に依存している領域）が、後世に残せるかどうかという問題である。自動車産業や電気産業などの大企業では、拠点工場内に生産現場と切り離れた教育訓練の施設と人材を確保し、若手技能者の育成と高度技能の継承に努めている。

産業界全体では少し明るいきざしが見受けられるようになってきたが、国際的自由化経済の進展に伴う製造工場の海外移転や製品輸入が依然として増大しており、国内製造業の多くが厳しい状況下にあることに変わりはない。中小製造業の中にも技能者の育成や技能の継承に熱心な企業も多いが、そのための予算や人材の確保が困難なことも事実である。例えば、文書化やマニュアル化が困難な高度技能の継承には、継承できるレベルの熟練技能者の存在が前提で、定年退職直前の付け焼刃の対応では満足できる結果は得られない。技能の継承は、若年技能者の育成から熟練技能者の確保に至る人材養成の一環としてとらえるべきもので、日常的な業務を通して徐々に伝承できることが望ましい。

ところで、私が専門とした木工関連製造業の多くは、1980年頃から生産性の向上と製品の高付加価値化を目指して、PC制御機械やNC機械を競って導入した。このこと自体は時代の趨勢であり間違っていないが、メカトロニクス機械では時事の生産形態に臨機応変の対応ができず、廃業や倒産した企業も多い。「ものづくり」の基本的な理念は、文書化やマニュアル化が困難な『勘やコツ』に依存する作業、すなわち手工的作業や従来型の手動操作機械作業に集約されており、手工的な熟練技能こそ緊急に継承すべきであり、ものづくりの業そのものも然ることながら、作業に取り組む姿勢や成果物の評価方法など、メンタルな面についても受け継ぎたいものである。

よしまつ たかお

略歴	1965年3月	職業訓練大学校 木材加工科木工専科 卒業
	1965年4月	福井総合職業訓練所 木工科 教導
	1967年4月	職業訓練大学校 木材加工科 助手
	1981年10月	職業訓練大学校 木材加工科 助教授
	1989年3月	千葉大学 大学院自然科学研究科 博士課程 修了
	1993年4月	職業能力開発大学校 造形工学科 教授
	2006年3月	職業能力開発総合大学校 退職